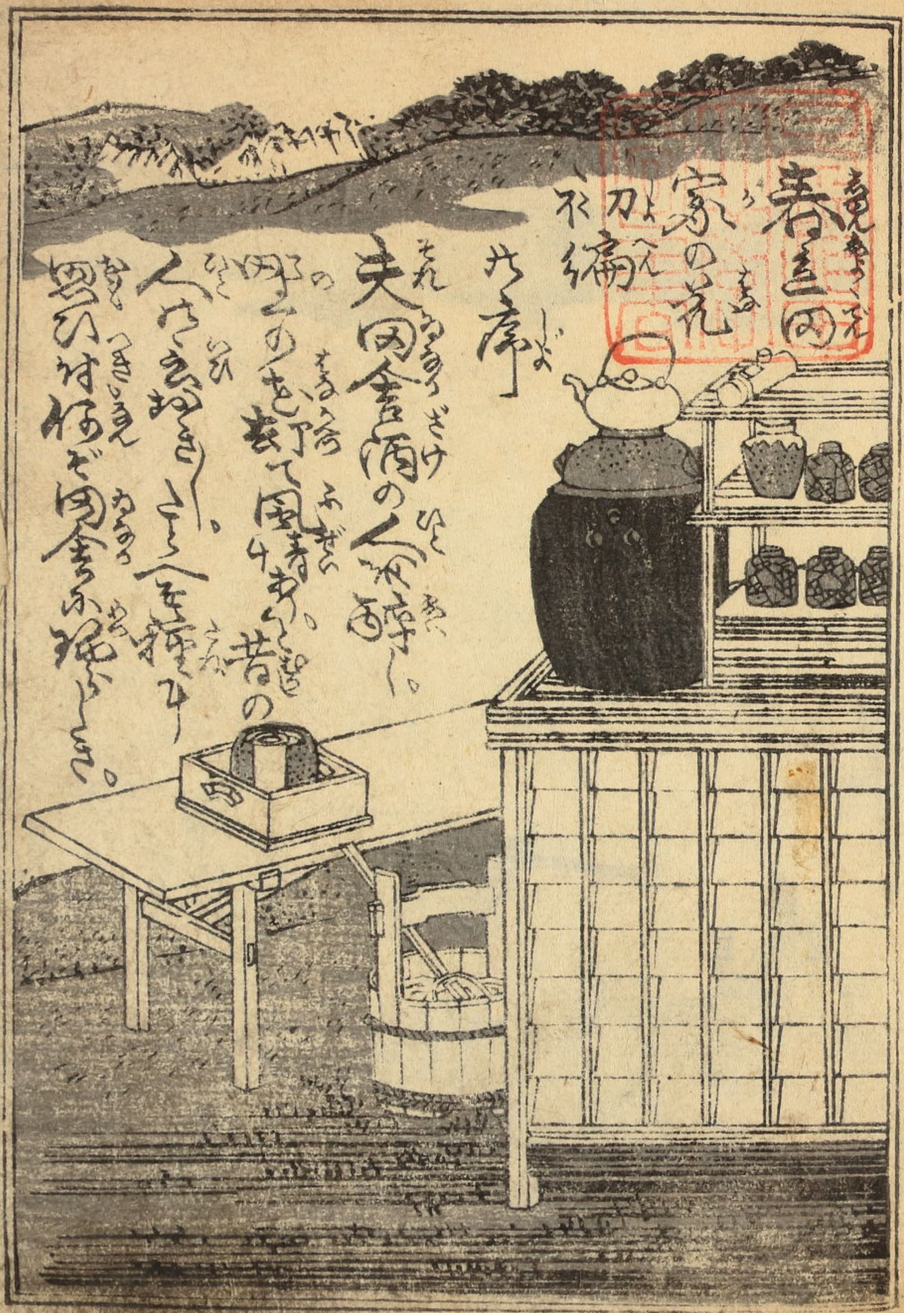
春色傳家廼

へ 13
2926
1



へ13
2926
1-5
門へ13
2926
1
昭和九年七月六日購求
9-2-6
併

東都人情
牡丹の色の
花川戸

長閑さを山と
もつれ合ひ
むつまじ
さくらの蔭
立壺光玉枝

春色田家の花

之巻

江戸

為永春水作

第一回

四海浪静けき御代の春の空に花待人の姿さも君の恵と
白雪の野辺に若菜を摘そうよう梅を眺て風雅男の
気いろふ安閑の農と偽て家を出た師匠の路連を誘ひ
合せ〜六七人新鶯幸場女の美人業も入交つて八重の
賑〜ここも思ひ〜に「サアまあ」どうぞ八田南洋ごらんの通り多ふ

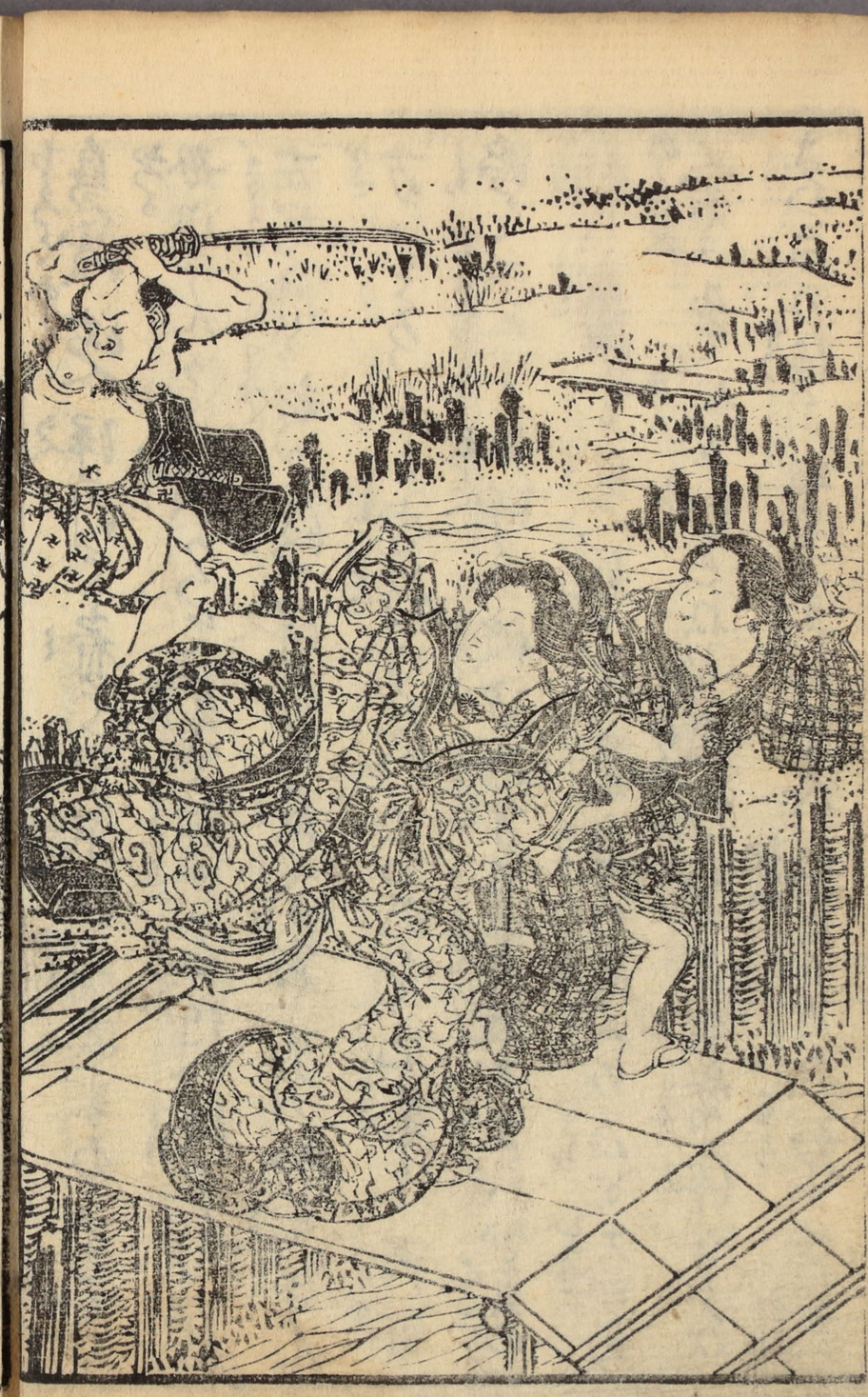
強でも伝兵の邪ナルヨウナ人ハ仕ルヨウニ鬼婆でも泥棒でも
しろそなた成。ヘ鬼ヤ〜ヤ〜ヤ〜

ぎょうるひとり　天　十二月　仁科義孝公の流と申ぶ　てみで候ふ
十月ひどうそて　病口うつ　生まれて　小児の血まで　ごまのごと
ト　茶屋つうふれ　言解もて　そて　紙の種　とうりさぐ　ちき
おぐる　世路　いま　田ひ　の　乳さんぐ　ふ　連の　人ぐ　たうる
ふぐ　ちまと　輝女の　二人の　ぐ　達と　ぎう　ぎ　ぐ　ものと
しゅん　丸の　輝の　ぎ人う　個　ふ　根の　ある　宣花　ぎう　頼と　有
ぎ　先ふ　病を　うけ　血ぐう　けふ　ぎう　ぎて　白丸　持る　大男
田の　耕　路　ぎう　一　ぎんふ　ぎ　ぎう　ぎ　ぎう　ぎ　目の　ぎ　人

地　ひぐ　ぎう　ぐ　豆　育ぎて　迫　対　ぎう　ぎ　ぎう　ぎ　ぎう　ぎ
ぎう　ぎう　ぎ　ぎう　ぎ　ぎう　ぎ　ぎう　ぎ　ぎう　ぎ　ぎう　ぎ
七八人　ぎう　ぎう　ぎう　ぎう　ぎ　ぎう　ぎ　輝女　ぎう　ぎ　ぎう
除　ぎう　ぎう　ぎう　ぎう　ぎ　ぎう　ぎ　ぎう　ぎ　ぎう　ぎ　ぎう
ぎう　ぎう　ぎう　輝女　ぎう　ぎう　ぎう　ぎう　ぎう　ぎう　ぎう　ぎう
ぎんぐ　ぎう　ぎう　ぎう　ぎう　ぎう　ぎう　ぎう　ぎう　ぎう　ぎう　ぎう
ぎう　ぎう　ぎう　ぎう　ぎう　ぎう　ぎう　ぎう　ぎう　ぎう　ぎう　ぎう
アレ　エリ　ト　ぎう　ぎう　ぎう　ぎう　ぎう　ぎう　ぎう　ぎう　ぎう　ぎう

ゆう食がけめて三四丁方角わかれ道ありて長屋
門ある一トうち人の大家はこれへうけ入らう所那なの
連の者へ来るゆゑ先へ行るべし〜わかむも多〜歩行しが
きれぐれ車場へ入れが付て まて〜ヤく〜おまさんも
お行もまぐまるひが初振しらんね 「ヒゴ屋」
屋が遅ひよ 「どよーも〜」 向の人ゑること直ぐ止
宿とり給ぐ手見を探び歩行のごめ場
八幡ねんのまへ そまぐけきどまえかうかう

島渡後人帰りて着てかくまる同道もあるまんが
母ぎんうら頼うて来て私が家内へ泊ヨ「ドレ
左様ぐら私が後人帰りて見て来やせうお茶さん
方ハさろ〜と歩行うち人トあうて元来〜田舎
路を三三丁立帰り彼方此方見まべおまの
新へかしも見べきるゆゑ森の向ふの屋を大切の
人家へ行ち初まとねど夫行あるうさる常体ゆうね
まぐの振よ おも人生けまべ 猫ぐろき ぐ せけば

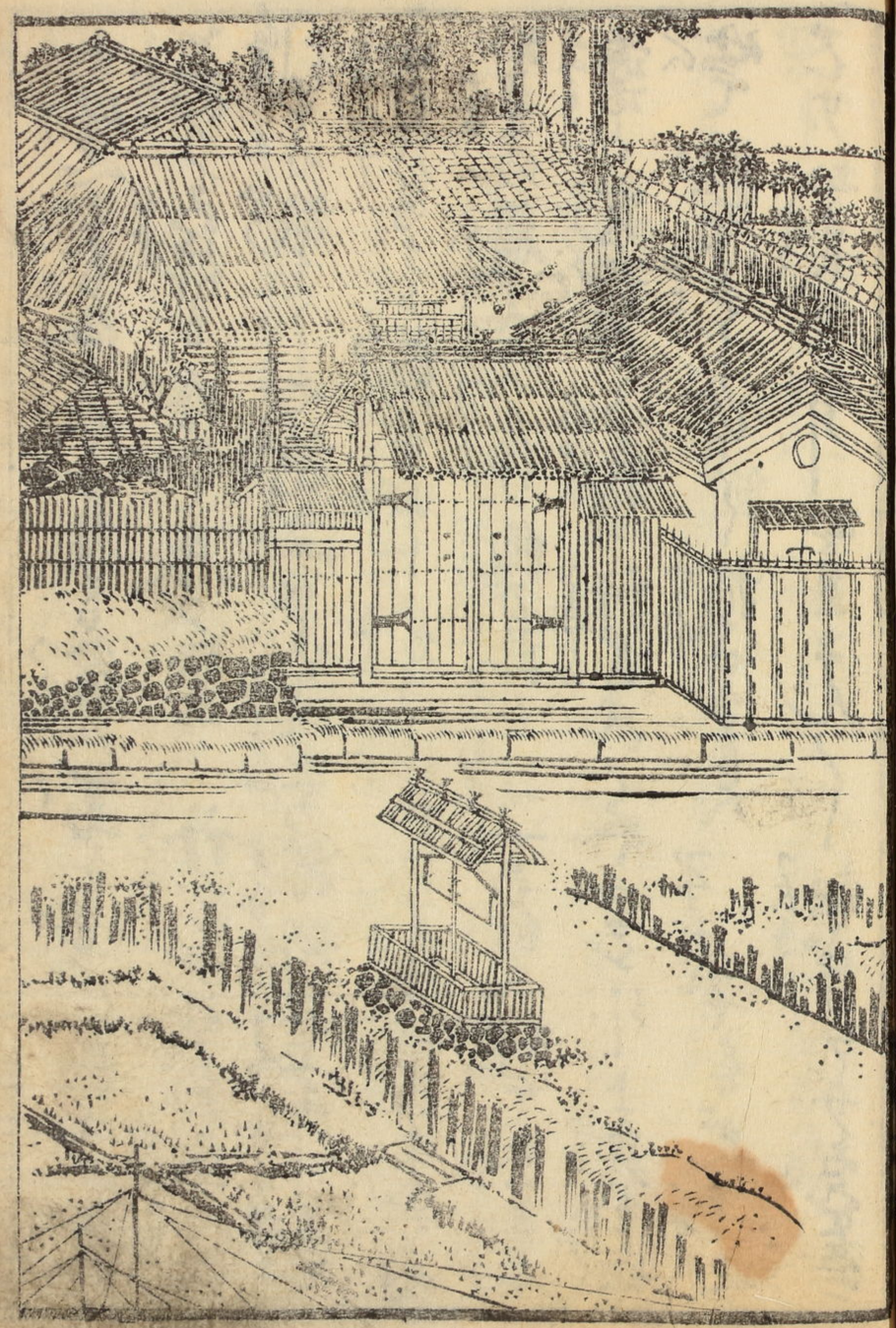


のき怪異のたとへ
怪異のたとへ
見るかの目を右へ左へとまよはせうとして
御くるお人の
初めは道理なるかのやうなれども
人もまた細をねらひ丸き着り
疱を分て相ぐるらしき着も怪我とて
血ぐるけうも
一人も考へ今九の方へ考へ
とのの考へまだ多くの方へ
怪異の人の怪我もあるとて見まだ

とのの考へまだ多くの方へ
怪異の人の怪我もあるとて見まだ
とて海女お竹身をとるとて
鳥もて来て来る「ヲイ」お竹どんうんごう
海の中へでも落ちの
きろ「モシ」私ハ既ハ切
きたハ大変ぶろけノそてお
竹ハ「ヱ」お竹さん「ヱ」
せんの「ヱ」竹をとるのを

さんとハ何のうさ出行とハ無のゝどもの有人
左様でゞざるまゝ心ケ何ぐろう遅上て無後ゞ
せんそもそも多寒ゝろ〳〵ト有人て居ハ者ハ
ゞ〳〵ハ無も寒ゝうゝゞ有無さんハ何様しとゝ
とうのトのゝとそ行ハ白丸を持ろ人ハ寒命ゝう
の事を聞〳〵ゝ申ゝけハ「イヤ之ハ事ハ見ハ
ろうとゝとゝ申ゝおゝ人ハ坂の有人居て気ゝ
居ろうゝハ御意さんハ何様成さのゝ有人といゝの

だのト無度と見ハ考へ「アハ何ゝ山鼻一
人の手落ゝハ何ゝ自て者ゝ人ハ食て相違て
尋ね様ハ無ハ出来ハ無て者ト者を厚ゝして
大寒ハ行ハ濡ゝ衣新の有を後ゝゞ言ハ
海の後ハ出ゝて走ゝ行く
如何ゝハ無ハ出ゝて逃ゝて後ゝ人ハ
時ゝハ何ハ稼ゝ路ゝゝハ隔ゝゝ



再説あまの門の内へ大めしのまぐ手ゆるゆる服わて
生涯おもてに愛あるとぶ物さ中しさふ雪月の雪ぶ胸
生へさらうてアヨト一夜の叫びつく倒まて正ゑ世生へ
けつと物まろ物付意の方をあぐろ家ぶ一人の女よ
半元服ゆて美雪かろ門舎ふまとうろ月俗品ー
かくで脇郷ろうぐ世界戸明て世の体を着ろうよう
どろり走ろとあろう白さし浪きひよくおどろき相紀世ぶ
一四舞ろけとび耳ふ口寄世

ト　ばべどもうろうろまうろ　ばべ　ばべ　ばべ

文を派及因みでも今〳〵との人見を捨て程の地
な所と同伴の家内を望て おそ〳〵アノウ家内ど
聟上様と同伴ふ望〳〵こゞまゝ外の男の連ひりまた
ハトあるアヤウ おまへ〳〵 ふ望ひ安堵けまゞ お千代に
向ひて途中の笑話 いろ〳〵 見うう〳〵 文を委
ち〳〵 ぬ〳〵 関屋けつゆ あ千代ハまゞ門の戸をメしまゞ

第二回

○扨此おまとり人浪ハ貴賤此所ふ居るお千代と
いへ文の縁者の浪うう 望まゞ 故ひ門て人
ち〳〵 貴信 不通ゆて ものて けつゞお千代ハ人 ふ泰
男ふ世ゞ様ふ 情深き 生得ものまゞ ち〳〵 ふ和の
中をいろ〳〵 実 意〳〵 世話をもろ〳〵 けり 又
かまゞ 母の身の上の 文ハ 涙〳〵 ふ〳〵
ち〳〵べ〳〵 先 此 巻ハ おまの 一件を 第一 ち〳〵
ち連の人〳〵のうりを きえ人 書つゞ まう 人 本 ふ 残
ようて 評 ち〳〵 人 ち

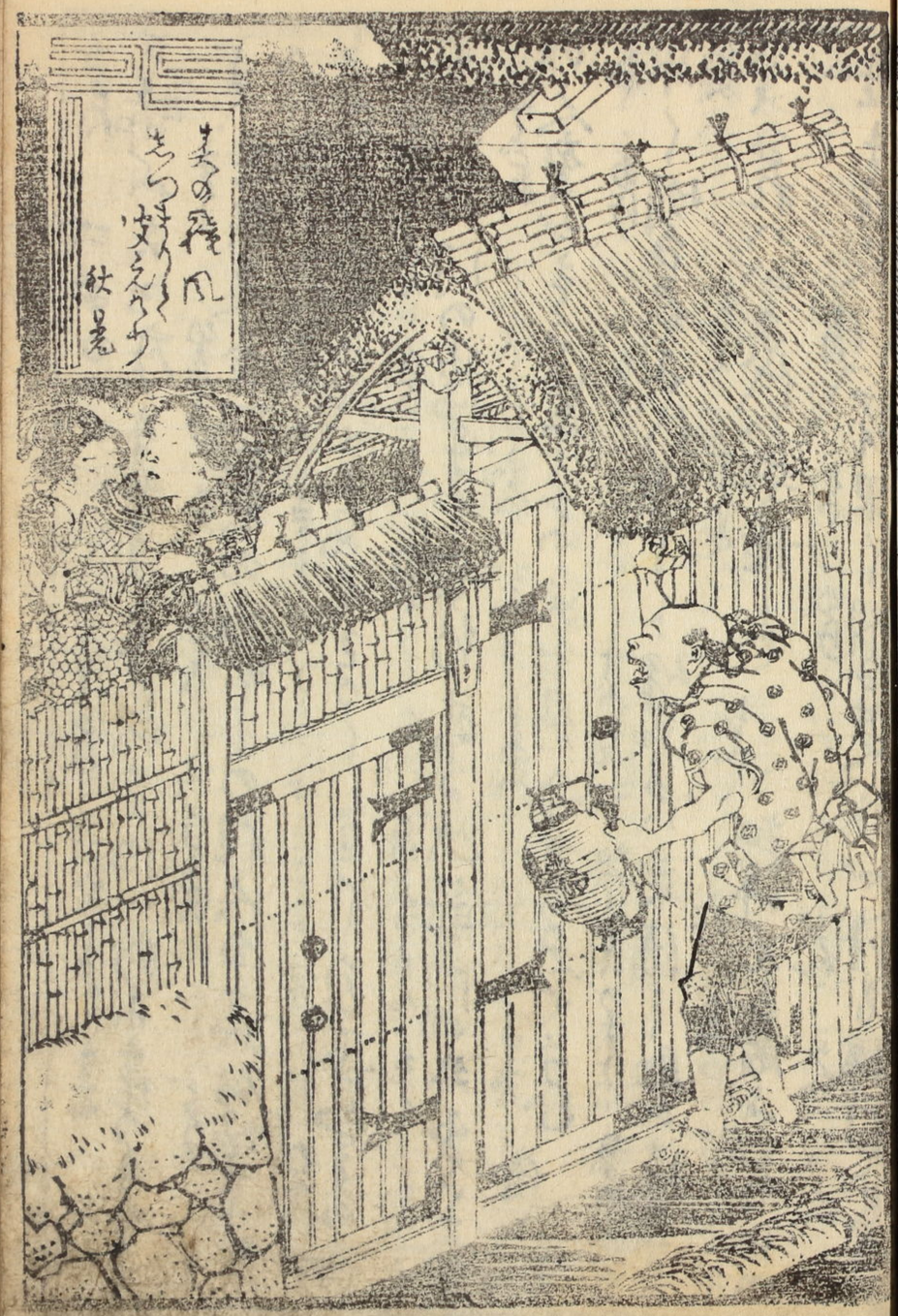
初て手負の養のうへ入相寺の燈の青の野風伝へて
最林〳〵おまつの法家を見やるおまつの
あふぎる月陽のとばかりくるみ見味要けまばかり千代の
匂ひ帰りきん　ちよ〳〵アイ　ねんぶつ
ぎよ　家きうん　手数の大連る家の峰一人で家蔵
のうへ　ちよ〳〵アイ　左右ぢ　ねんぶつ　家内中　帰りてきぎ
帰りて　ちよ　のごきまきけまどる　即時　お家　ねんぶつ
おまつの金物屋の　ねんぶつ　他人　ちよ　先へ帰りておまつの

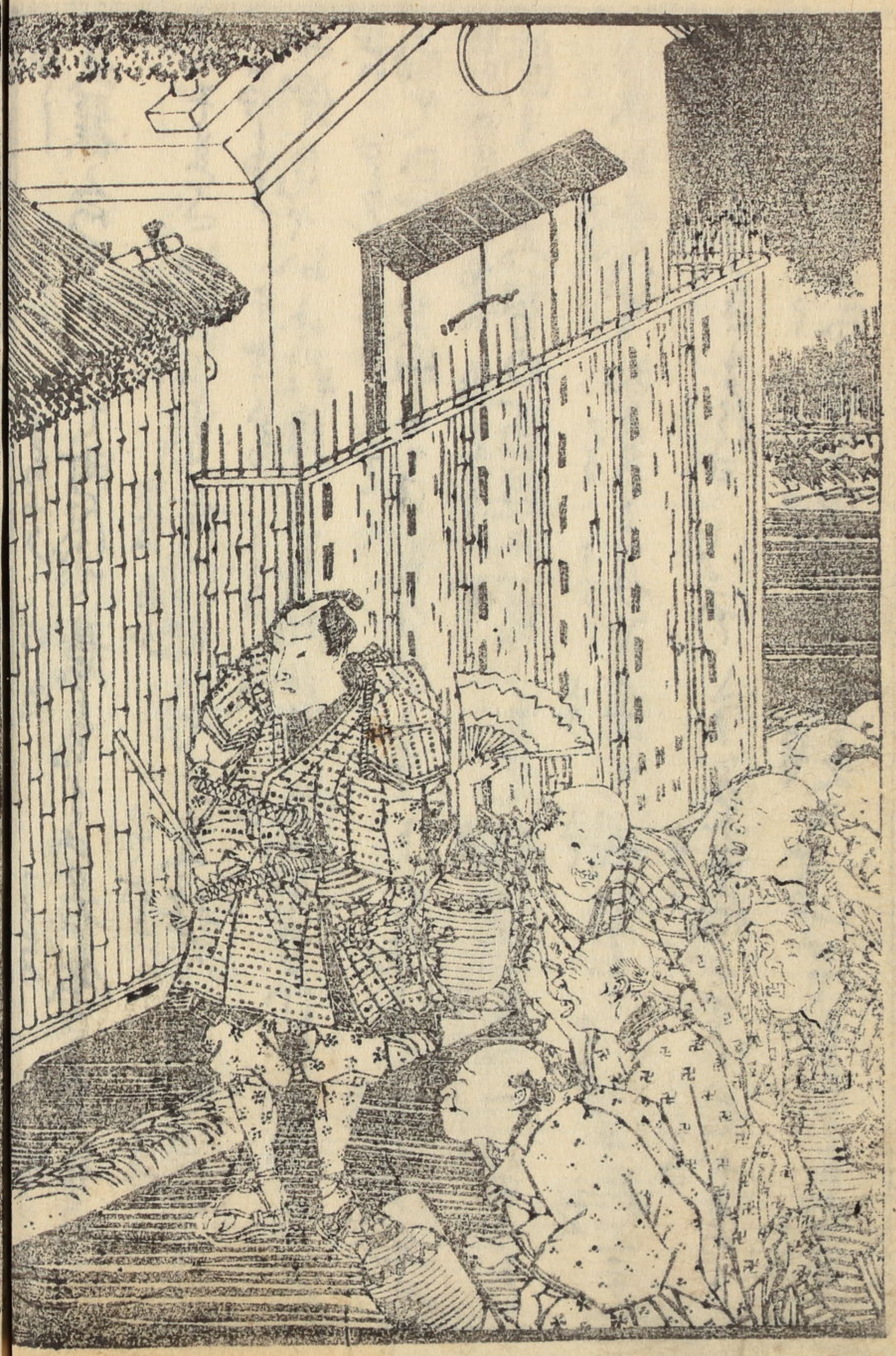
ちよ
ぎよ　ちよ　林〳〵　ちよ　生の　ちよ　行て　おまつ　お家　きぎ
れ　連のかくをおまつ　ぎよ　ちよ　松　ちよ　ちよ
おまつ　ちよ　ぎよ　ちよ　ぎよ　ちよ　ぎよ　ちよ　ぎよ　ちよ
ぎれ　ぎよ　ちよ　ぎよ　ちよ　ぎよ　ちよ　ぎよ　ちよ　ぎよ
見ちよ　ちよ　ぎよ　ちよ　ぎよ　ちよ　ぎよ　ちよ　ぎよ　ちよ
ちよ　ちよ　ぎよ　ちよ　ぎよ　ちよ　ぎよ　ちよ　ぎよ　ちよ
ちよ　ちよ　ぎよ　ちよ　ぎよ　ちよ　ぎよ　ちよ　ぎよ　ちよ
ちよ　ちよ　ぎよ　ちよ　ぎよ　ちよ　ぎよ　ちよ　ぎよ　ちよ

此家へ永久の住居でうしヨ清さんの四角張の若旦
さまが四角張で私方へ入うと四角張番の男ふ近い用金で
四見物拝ぶをしひへうでこの此七八町先のお旦様へ四
仮居が出来て四家まが四人とゆとり流が十人ばかりまで
居るけまどよ主所が後へうと清さんハ竹家を當金借で
お主のごうまもの若旦さまとの二人ハ城へまりくまること
ゆくまもさまん拝のうへ四番でまりるへハ竹家をんがもも
着て上度拝ごョアイタ四金庫氏の光氏まのの画ようも拝

美雪様ふてそして町風で言ふ若旦さまでまる人
よでまでけまどよ女ハ縁ひでおまを拝ぶして主人
お側元やお小性達が長羽織物てこ気をうひけまどよ拝
向て四覧長成さまのまうへ
清さまの主人の拝ふ主人
助さ様の百姓小屋まて帰ふまり門をまく
ゆえ主千代ふ主人まる耳をを立て風ぐふ
四門をまきまきョ主拝ごョ私がまうと
拝て見て来ふう隠まそ主ョ

「ヲヤまでまでまでまで主拝


秋晃



ゴザル
ゴザル
ゴザル

有ごとへぞんじます　清八　ナニサ村のお世話よりもいて居る
ふ位な事へあるう　おぢ　お停でハいろ〳〵入ますとき
今もやっと運う七人ぶり不幾碑狂人のうごうふ於て
辞が理ふらばあやまるふ相違めうまへ　ま時ハ免して
ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　百八ッ〳〵うとまうまうこと
村中ふ多の病を清まうこともござりません　接よ
で見ますまバ張便ふ　ひうしまたのが　私ともの方ども
ろて
勝ますでござります　左張ふ　家早おいろなものごた

ますトいろなを巻て　立帰る　清八　即ハお千代の向ひて
清八　お門を早くメと不用心ぶと思ひて　手を
所ふ居うでいろ　ま　ハイ　お帰り　注成ますとうト　接
をおぶる　清八　ア　徳町　新屋のお　まさんで
ござか　お屋敷ますヨ　清八　立ち　仕張しでおまさんが　仕所へ来ま
のごふ思ますとト言ふ　ト言ふ　夏へ　行て　表顔を　長
久て　清八　ア　ハ　お代　後刑でも　いろふ　今　脱ぐ　表新ふ
血が付て　居ますいろ　雑肴で　異なヨ　ア　ア　毛　味の悪い

仰せでござるまいぞ　清八　ナニサ今帰りたらば自丸で切り
合てさらば所へ通うかけて無疾自丸をとりあげて
鎖めて参りたいとうの変ずもちろん　左様でござるまい
ふ。アノおまさんもその酔狂人ふ行合りてあやうい目ふ
あいまうぶつ仕家へ逃てお出のでござるまいヨト申さる変
多通りのうとくるくる　清　清ア申ふまあがうゆあふ
清　イヤそれは大変なたりごの
清　イヤ様を使ー　清　イヤそれは大変なたりごの
まま様やうおまさんの連の人達へさぞ気をもんで清

方と尋ねて歩りざらくが気のまあるうと　仰幸早く
知らせて参ぜうめでござるまいねへ　清　左様ナさらば
けまどる仕方を當ふふ疾中まだうき歩行まされ
まあ〜そして弟一人〜家内も不用ばざうふ仕様が
多へアおまさん今度へ仕所へ止宿で明日のうのふまる
がりまあアまいる　ハイ有がとうございまいト涙をうら
やーが参ると申ると笑ふまざざ〜　秋八
気が落ちて涙ばーー　そして涙がこぼれまいヨ文じわア

どうぞ わたくしどもの 率明日は 殿様 寝て おるうちに おれなんでも 「ナア 二
ちと 出ます 邪魔 なる 吉人 ろへ ぶつて 私と 同座 ふ お客様 お
直ふ 教が 嘆るうち 左様 まると 連の 人達が 見張 ごろ れて
来るふ ちがひ ろへ ョ 待 をるく 清さん ふ 連を
かぐりて 来て 笑へ ハ ト 居る 主新へ 清 助が
手役の 近習の 侍 和順 實 ふ 助と ひの 来て 吉 笑ふ
ひの人 実へ イ 頼 ま 実 ふ 助で ござる まへ ト ひを ん ぞう
清 助へ ちと 知て 清 イヤ まへ 和順 さん ねう 門 者が

実 ま ふ 実へ イ 上 私の 内 閉で 来 ま ふ ごが ふ 見 伝
下 ま ト ねる 嘆く 清 ハテ ふ ま ま ま ま ごの 行
且那の 四 威 先 で ま ひの 順 安 ハ 家 早 ま 報 ふ 人 義 ふ 来
ら ま ま ひ ハ ま ひ ま ふ 婦 支 門 ふ 居 る 部 ま ま く 約 束 ま
男が ねの 門 て ま ま ま 主 男 ひの 来 ふ 宿 人 ま ま ふ 減 習 ごの ま
ねう 且那の お ま ま 陸 ふ 気 づけ ハ ま ま ひ ま 実 へ イ
ま ま ま ど ま ま 兼 て う け ま る ハ う ま ま ま ぐ ひの 女 張 ひの
お ま で ねの 和 ま ま る 彼 小 万 ま ハ 大 仕 お 遠 ひ 義 ま ま て

今夜見届く〳〵連て来い不ごと中うらぶ茶屋へ参て
呼で探べうぶ供をゆる色んのうのと先刻うら四五度で
流人が聞うまうて居まぶ色んでも参まそ〳〵四側の
者の迷惑としやうぶ法様を待でござるまぶ此茶菓
さんお出成て行下まし〳〵そまでうけまぶ四新造さん
でもあうう成てお深留屋の一度も参うまうて
行下うへけまぶ私ども八必ずと参りまぶト思
向様方ば清助も傍半思ひの信切者隣うへ来

義の仕ゆえ　清　あうぶお千代でも出機嫌うぶひふ出しま
せうト言をお千代ハ障子の蔭ゆて行ぶ
居へ私ハ今夜ハ泊でござるまぶョまして左様いうまぶと
お茶さんが聞うまぶハよ　清　エ左様うそまでハ知うまう
お茶さんを勝でござるまぶといひて四方へ連て出らば
い〳〵左様まうと仰し〳〵者様の旦那ぶうう者成お茶
さんの客様の茶菓のを四覚ぶうと直ふ四機嫌ば四
仰う成ふ達ひうふお側の花の義を頼ふ

ひの車行て居る千代ゆへ芝居へ連て行くヨト
無理ふ通りて居る所へ浪宮の亀が
偶〳〵このことお千代とおまを仮の厩へと連れ
けり

春色田家の花二之巻了

春色田家の花二之巻

江戸

第三回

為永春水作

新田左中将義貞の次男新田左兵衛佐義興八南朝
垂三の遺臣あて文和元年の二月中南帝の御名ふ義
を起して武蔵野ふ桙出し小勢ともりて当時の大
軍を八方ふ切崩し関東ふ軍威を輝し大勝と作り
勝〳〵も此第四の渡しふ赤紀の三し神霊を

きてこざるもうじん　ゆるまろ
新田大明神と崇め奉りて　そもそも　新田　その　武士軍
諸神の　伝へ　宜ふ　歳ナ　日ぶ　暮るる　公安命　右　おお　仕奉
だくらく　八ヨト　いぶちやくさのおやぢ　ちやく　十二四ゆうと　歳ます　まぎ
お日さまの　へうゑ　ゆ　ゆうゆ　注ぎ　産まれ　お幸　新田さまの　軍
記せ　まう　空　関せて　注ぎ　獲ふ　頼ふ　まれ　ろ　「ます」　西　賞る
せ　ます　私が　まる　ゆ　真ふ　ゆ　人ぶ　ゆ　まる　テ　ドレ　く　ま　ろう
武　業　に　の　軍　の　所　を　ま　一　ふ　ま　ろう　ち　「ゆ　ぶ　ヨ　ま　お　ど　ろ　く　も
ろ　ん　ぶ　そ　ま　ん　左　ま　と　お　ま　ま　ん　ハ　ね　ま　ま　歳　ま　ら　ふ　ま　「　ヤ

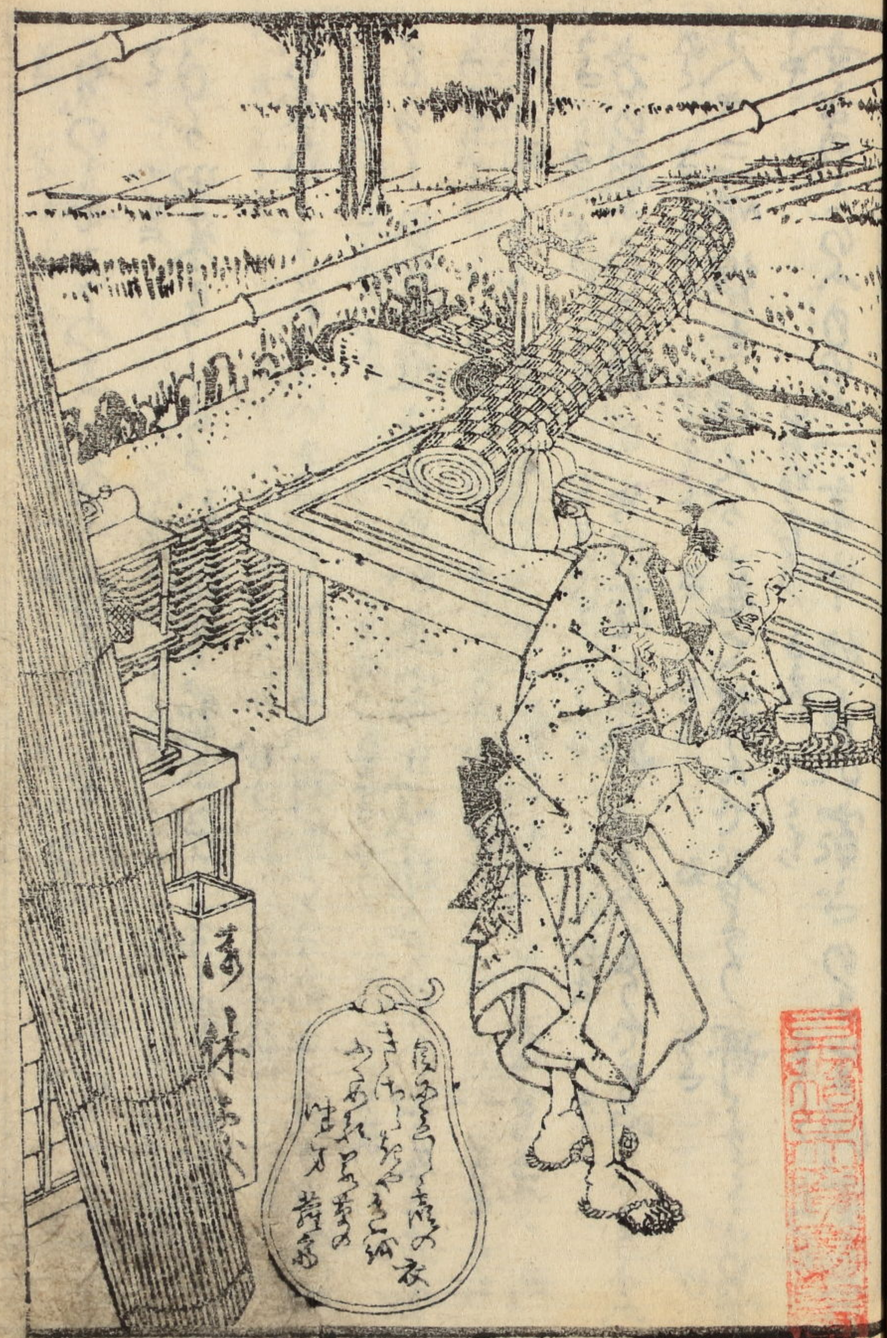
ホンニ宮　早　過　ぎて　お　ま　ま　歳　ま　ふ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
ま　の　ま
ま　ま
ま　ま
ま　ま
ま　ま
ま　ま
ま　ま
ま　ま
ま　ま
ま　ま
ま　ま

お供してまるのごとの人時々うろうろお行き申とふる
ハーのごとくあまたあまたバくくあまたと見る中ゆ法名を側へ
通行　一ぐまん　四覚　法成　山通の旅来ごうふとうとうと途
中の宣性　滝ぎわ　お嘉の　わくがわ　ぐうーうーうと
ふお行きまうまと身の逆人　落ちるおりのきと一ゆくるとあ
ろうまぐるくゆくゆくあまたと気とのうち元来ーあへ
引逆人　逆通　ぐうろひまる　中ゆ　お関人　長行　ある　旅の
おまゆ途中で　ぐまでて　初三度　人　平時　うとものゆ

且度中　いぐハせんと　変だー　地獄　として　物を　行へ
滝ぐうる　當　女の　ぐまて　「三間　章平
ぐうゆうゆ　経　相　ーて　平行　ぐハうゆう　「左　ゆ
身ゆ　お行ぐんゆ　逢ゆ　ゆ　他人ゆ　ゆうくー　関　ぐ
うくーあまゆ　おまさんの　わくがわ　ゆまとふるうけぐ
ア　者一ゆ　お行ぐんゆ　ゆ　落て　おまさんの　行を見ゆし
うりうとゆ　初ぐまぐる　解　ゆ　ゆの　ぐうぐ　入ゆ　ゆ　久　川通
まと　初ぐ　因　平　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

道方おくまるぜうり〻〻うくんどう多り此方東へ海を見合
うぐらうも見へあり〻出る おまさんの方へ来と所より
そうくん後の方へ道さんぐらう南と北へ引きとて来く
陽ったのぐうり〻〻左様り左様しくてあるとび兵後へ浮りて
雪をつるむ様よさぶしくてもさびぐまぐらうへ〻〻ちまとじゃア
お様〻しらう宜らうれへ私が宗門へ浮りて言解ぐうく
ヨ様車早くまぶしくてお長るれへ〻〻マア様ふしてまりお閑
きんとお竹どんとば様で一家としさ新へ宿を頼んで

そまとうう男のふへを死をして今夜泊通しでもうびね
おりじゃアまりう〻〻左様うまとじゃアアお閑さんの止宿
家成家を早く頼まん 私も流人と一閑の泊通
でもまぶしてぶりョメイ豆様様しくてお茶さんぐ泊ふ
私ぐもよ 四伴でハ部で不用分でどざわるまんまようろ
お茶さんハアア宿の止宿でおまと成て行ちまー〻〻左
様〻〻方が宜しふどざわ まんまアとと様の所ぐ大丈夫
雑宿を早く見付度ものぐ 谷様ぐを茶店の老夫



気の毒そうに見て居ると、しづちゃ〳〵モシあなたのまあるうすが出来ましたらば行燈も拵へるうまくしてハ仕成方がおぢやるまいそして代賃ハ村でこぎやるまいとう宿やまの〳〵四新道さるのお止宿仕成様なるものハ出来ませんが此二町ごうう先の宿家が一軒有ますして高ちも元ハ町方の般ふ花な所の生れ度見郎ごろう今でも慣せらるよ人や三味線を弾人が来て拵んで居ると哥よりこの頃女ばのとの人ものが一年中拵ものハ家ごのふ生得実意の深く見郎で行のでも他人の都義なるものを聞と鼻ふ引張て世話をする方でぢやるまいがわしと手前一番仕成て御頼みなるとうしてばかり行燈の員さそなるうがなものでぢやるまいモシそまどが成度べ私の服が手宅へ来ての稼ぬまわ所で居ると流人さるなとお連中を行てさのんでよませうメ〳〵五左様ちそまとハあるまいぞんとうこと。ノ左様して其所でそまとうあまんと有ねて其くとせうこ。まるべサそまもモウ時刻がおくまと

うらまちの方が便利ぶらんとお国中もをもて潜公させ
一まづ千家を頼み桃灯木の開意をなし手上あて
事ならぬ事ばかりを相談とくの人業者の老父の信
如を事ひと頼んで業内をさせけるが彼富家八郎兵
衛の中ふ記しる業進とのへ人の極めくこと見せる故
茶店の老父の言入ると聞て勉強の義ありて
さらも人々と座長へ通し早速ふ出て對面し接待の
後桜が滝と直ふうち解け大ハトキニ事ありがとうさんぐ

少、銀少お連の中ふ米ことをもしてどうさぐ四
紀ふうとうと聞へ時刻もるるふ極よどうう
松中ふさぐし出ます宿屋易おまへ出ますも派
ぶくと言ふ成へ伝村の庄屋さん今頼ましまいぐる
ありと近所の庄屋さんの方へも使を出して上極ぐ
家ふ本銀人をさうぐせとうとぶとうとうとうとう
りのとうきとうぐ又山見とりよどるひうう運ふお
ふ門て往来ふ立て居成ま仕まひ和上他人の家一

迎えんで居るうちに、その後ろに西陵が白引でも
あるところのやうなものと、樣子して視ると、
夢うつゝやうなが、見てもしばや今夜のうちに
行やうにまいりたいと、見ると、横丈に長く
さうお園が、青ざめて、涙を眼にうるうるの
まんまる、大へんイヤ、まごうしたを言やうしが
紀の河、ゆやまで、他のもの人お安が、上宿で居ぬが
中に上方の人、初見の先生が、来て居ぬが、上

きんが、當人は、うつむいて、顔を、ひらきて、
見ると、きつと、人でも、待人でも、文、頼、
きんと、ちの、安答も、ちやうと、その、ハイ、
かぐらの、どざわるまに、左様、ならば、御、卒、早、遠、
中て、大へん、ナニ、まに、勿体、ない、先生、でるの、
ハ、親て、呆まに、トりのひく、奥の方へ、向へ、大へん、親、先、
くヲイ、竹乳山の、先生、きん、その、一、花井、親、先
きんが、御、様、て、什方、ハ、大へん、ハ、ア、お、来、

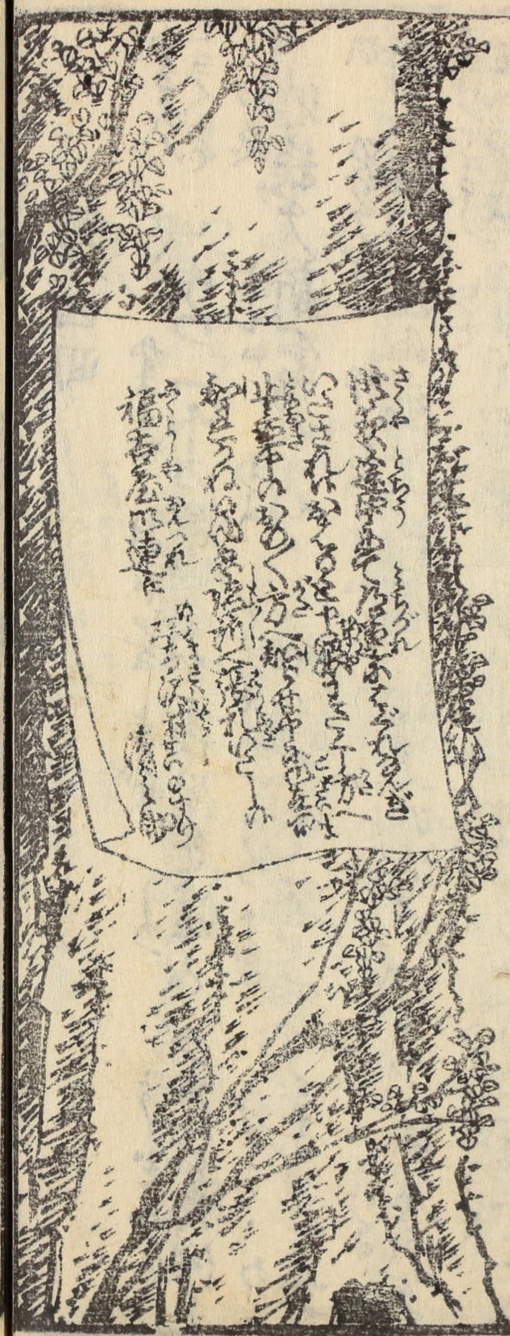
十二サ二三日程経て来て御座候ゆゑ
久しぶりの親戚先生方お園の母と
倩見て　さて先ハテナと思ハ如何
程儀ぶ　出来て来ました久しぶり
ものをいふと新富人ハ親光の
向ひ大イヤ先生ハ遠やう居ます　今
御てお家ひ中ス眼ひの鼻の上ハ
せ　俄ハ　途中で行ぶ居ると
居るのの出来るのんぞといふ
私ぶ考へるハ不及ものまもハ
ありません　宮ハ大居るのぶ
きふんとうんぶ変と見えます
苦労せぶハ平ぶでお休
今ハ謀ハ明日ハ再会まつぶ
出来て来ました実ハ安清して
うて花井氏ハ奥の方へ入けぶ

ぜんぜんの方が冥ごろまでうつぶす明しさ
らば高度梅よりうりませうすり〜思の切りで左様な
世人どり〜寝所をとらんとまさやうと奥へ入り五位の者
言付床を敷き寝屋へ人〜を休ませけるべお園へ
ねども袷方うるけるバまと意〜渡り寄ひ人〜と
日まのけの寝衣れ休ミ行く終夜物をゆるあけう
蓮の人〜も不寝貫ふ〜ねど常うき形れ物を
夏北〜山家れ夜を明せ〜とぞ

第四回

三三人へ山下の茶屋女夜風を凌ぐ〜茶屋ぶ
べ旅新家のにぃと移り変りまま見て歩
行て子別ら三ふ幽又れ家へ新とけ「どうで今夕
知人野鳥が遅びぜ様がつ人女「ナニ
あらりくがにぃも山鳥も引〜投らまてうあげられ
りバ留山さの下茶屋の役人の清〜助さるをうく
男ものの葉が初俳も達者ごと見えて眼目の蝶牡人

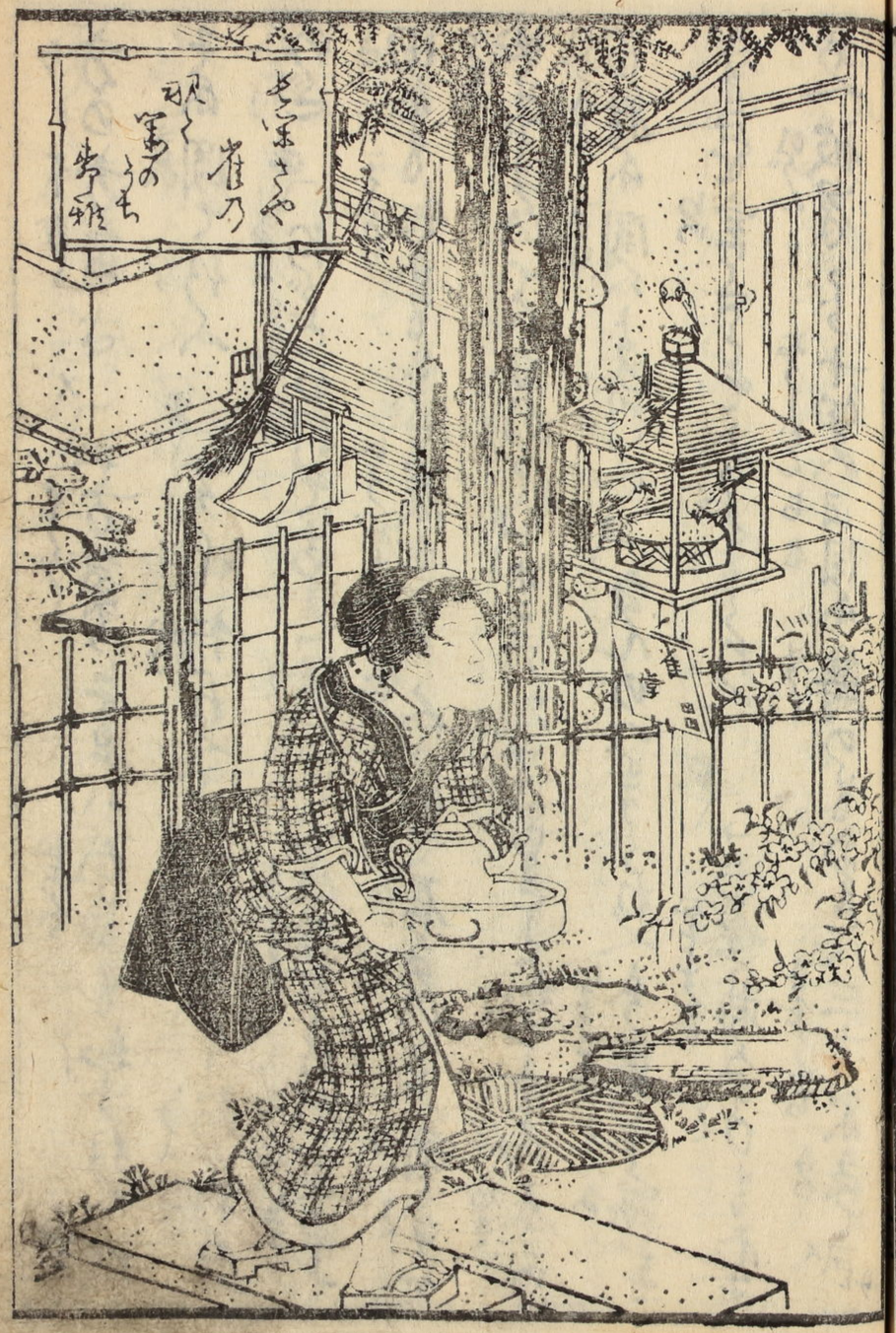
ぎゃうとさぶ〳〵と投げこミ　十「イヤ　ちくるぶ〳〵と藤ぎきのつる
けものの藤ぎで　藤村うんぞめく　美多怪殺人　ものるそ　ぐら藤イ
奴　ちなナ　「ヲ〳〵　此　後本　わぐろう　書付　ぐらてあるぜ



「ハテ　とてもや　暗日の　さぐぎ　ろ　ぐ　ぐ　ぐ

方へかへらるる所なり来るる三人連れはさきぞ茶屋の家迄
止宿して一歩休まるるお星が連と供の人々夜の明るのと
待兼てもやくも山所まで星
三人へもとるあアたごうへ〳〵やく〳〵アホット息を出やうど
仰ふしてる早くお国さんへ知らせ極じやアねへかと〳〵
待かせへ所ハしてあるうめくてア山平の村ちのふ前へ来
付てあまさんの色を視てるう一人先へ引返しとお国さんを
知らせるがりじやアねへかと此通り礼をおしてはるでも先が

仰の様りへ知せて居るう知せこうへ〳〵左様のうも来ぢやア
ア三人で出すもやく〳〵山清〳〵助ちのふ人の家へ急で行
と変と使やせう〳〵左様サ〳〵供ぐうも気が急まうり
ちう呼ぶ立て立て草所が出て来た様ぐうう〳〵コウ〳〵
まぐらぐけうあへ早のぜ仰でもあまさんふもやく〳〵逢わへ
ゆハばりハちうれへ呼ちう又仰様りへ呼ぐうう様食
ぐまるうおまこのの故字とこ〳〵行まわへ様と様と
ハて行へ〳〵サア主様ちうぐもやく〳〵行へ〳〵山所うね



方の方角さ　「エ方角ッそまハ仕事も知られん　推
ぞん聞てゆく　「サヽ行わんぜ　「うぜヽ　分が移れん
のご　「分ごとゆけてちまと見うをん公道つゝの田甫中で
田ゆも畑ゆもまで農業の人が出て居るゆう聞くすが
出来ますひでくるゆう　「ホンニノウ　アまもと初つゝとバ今の
百姓ゆ聞べよりさ　「うんのつまゝらわん今更ま張おを
ままを言ゝとちづまゝらわん　「十二遅蒔ゆうもある
ゆ　彼岸ゆう十四日頃ゆ蒔のもあとバ三十日ゆ立て
酒屋で居ゆ人後わん分でも宮ゆ〳〵西北の方へ歩行て
見張ドヤアわんゆ手伸ゆ人ゆ逢ゆ百姓家ゆ　「ごめんくださ
ハナ　「どうぞ左張ごとゆが分ゆ所まで見渡しとも今
見へどゆ家もゆのぜ　「ままバ新田の軍勢ハ小手毛家の
合戦ゆ支度て廣〳〵ゆる武蔵野の原を坂東五十四里
五十次の原まで豆利勢を進ゆて　「そまま見わん他人の
妻を言ゆゆ　「お帝ま　「戯言ゆ　「ほをゆて居ゆゆ
サヽ〳〵　「仕路を左の方へ行て見張ドゆうゆ連て　「見張ゆ

たゞうの方お園へ朝とも露知らぬ暁方の雨を様子れ
居へどうとう眠つゞ夜刻半頃より目を覚し四辺を
見まゝば枕元の屏風の外ハ陰ゝ明てゐつゝ雨戸を明
たゝの表の日新のさゝ入て庭の高ゝ雪の降ゝ
ハゝ園元けまゝば早ゝ起出る前へお竹ハ煙草盆を
持参り度ゝ見ま頃覚まゝ
和まゝ嬢ゝ濡ゝれ流人ハ物語ゝ
根人ハ先刻起まゝて三人ハ同伴ハ新田さんを尋ね出

まゝ二人ハ新田さんの在宅の早ゝ知まゝ
橋本に頼をうけてお百度をまゝ
左様ゝ人ゝ
ゝの門家へも元の毒ゝ
通人で伝ゝ入ゝ
まゝョ今ゝも流人ゝ
成て歩ハまゝョ
延ト煙草を呑で座をたゝ

お案内へ行のうえ　なるほどアノ茅屋の老父さんの腹ごと
中に おまへが私の義理の義父を教へて呉まして　まあ
今お嫁様く　お嬢の乃浄水の傷を汲で　私の左腕中て
血まるこゝを　まあ左腕うえ　何程せうのうまく私の乃尼分の
命てうふふちて　アノウ他のお客と　やくハモウ先刻お起義
と　極めの　イエアノ　昨夜　乃覚　乃覚　観光
まあとやうに早く　何所へ出て　お出　伝成　まるごうとう　女中の
お客へまご　眠所　お主　伝成　極でごゝるまるこゝを　私ハ昨夜

ちうつと　奥の方へ　お主　伝成の　見上まるこゝ　お客
乃両女の　美羅　乃朝遊　方で　女
まるこゝを　本三　泳部　昨夜　極　私　ちう
けが　私ハ　まるこゝ　ちう　放
関て　居こゝを　そして　女中　連ハ　何所の　産義　お休と　高て
乃主のごゝ　ハイアノウ　此乃　家　側　お客の　一所　頂て
ごゝるこゝを　乃座敷が　見へまるこゝ　所へ　案内　まるこゝ
極でごゝるこゝを　ハて　左腕　入　どうく　早く　色　洗て

旦那さまの服装のうつくしさ
おまきさんの安産を早く願して
茶碗中洗を早く品を見て
おまきさんと共に懷
抱上げ
懷を早く浮世
ト言ふ
せんヨトおまきをお國へ
障子をあけて
奥へ

[illegible]

[illegible]

正ふとまさん三條の李君ふ羽衣とうしまのく

天津乙女ふしまとく貴間ふて野暮らしふ

町とのくとも楊貴妃とのへとまるくふまくさ

ぞく品戦してまぶ間るる安のとしらく家

ふてまくふ書写しがさ

○髪かうち堂まぶ見ふわちの白て

うしろ姿も見まくる青柳　尾州一ノ宮　為永春蝶

さて此後さを和らんとるのハバ見ハ〜二編をよろしくこれより

次の巻ハ又あまたの古千代とのふ女ふ伴ハ是亀山家の所利

屋敷へとる為ふ[illegible]

春色田家の花二之巻終

人情翁

為永春水

真作

春色田家の花三之巻

江戸　爲永春水作

第五回

たゝとう後の月と花とをあるじくハ公方ふくとん人ハ見せぬや
と流ぜ〳〵書の歌の庭とゝハ不圍も塗庫の彩色を
清〳〵〳〵〳〵却て臨〳〵吉僥倖とゝりぬる世家ハまゝこゝ
ねゞ久〳〵逢ぎるお千代ハ逢て澄〳〵ゝ安堵〳〵〳〵粗
〳〵清〳〵駒の主若ゝ泳生〳〵駒ぎの

養生訓と甘くもこそ　四季共に屋敷の止
宿〳〵とぞ

十月十日　紙員二丁の内八はこそ　所の物語り
そのころ　主人うて　漢文四べし　数八のもとにも又直に沐生の
どの〳〵の屋敷　なて　繕〳〵の限とこそ
所八松の葉と　実ハ　説ねど　年経る松の下露ハ　身の延伏
清涼の泉ハ　遠山並の〳〵ぬ　暑中を消ハ　奥の石ハ　数さる
清涼の透徹　まて　薫る人　雅が　袖の　香ぞ　身に深き

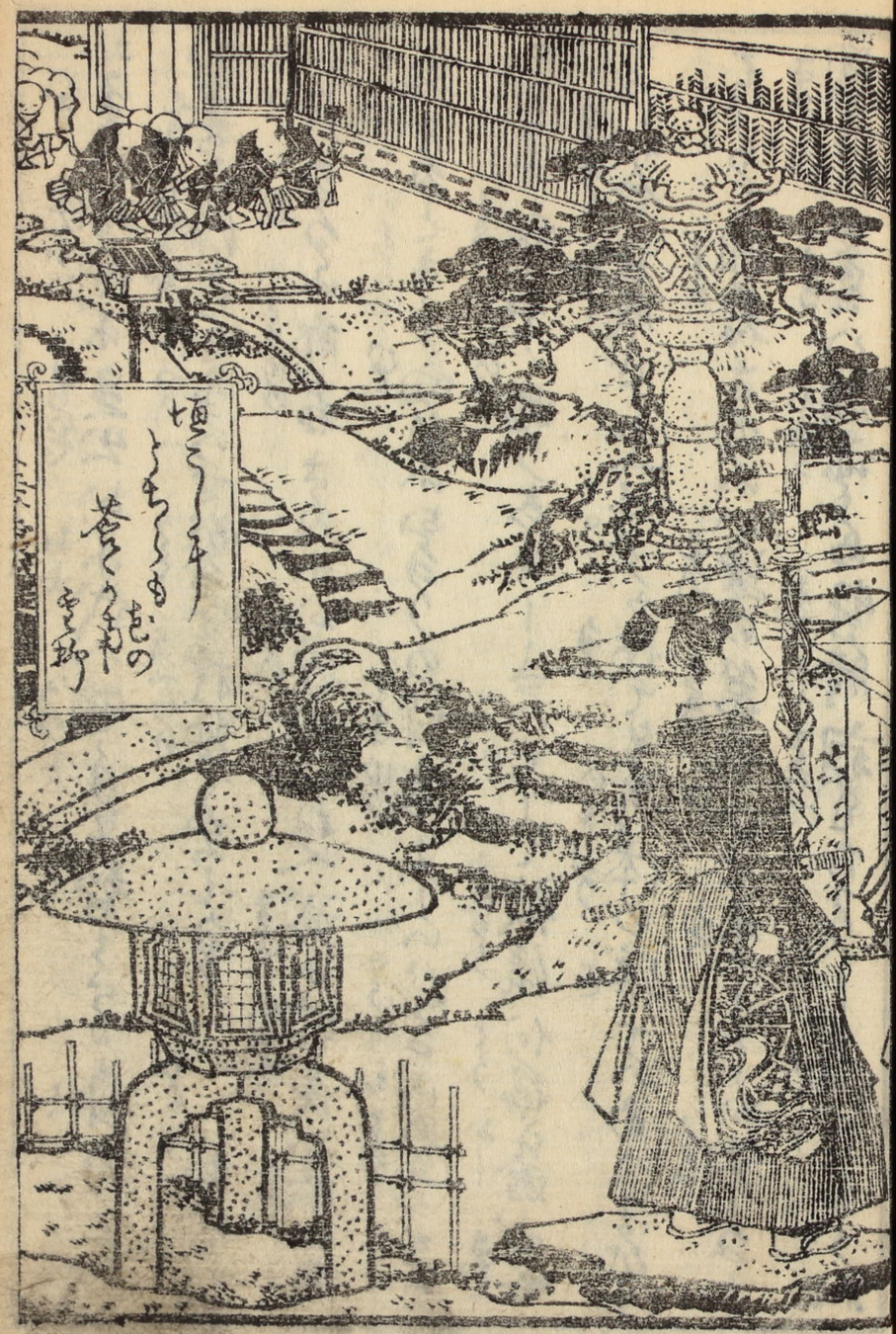
徐江月　ゆも　四〳〵る　窓　ハ　窓の　月　射ハ　流の　面　金鈴ハ
三人の　玉兎　ぞ　ゆも　ぬ　赤道　女の　眉　眼元　白　黄顔の
雲数　ハ　ぎ〳〵　梅の　風　情の　柳　ハ　夜の　明き　簾　をへり
来る　人　ハ　年の　程十七八　と　見へ　る　若　色　いと　白く
眼　ハ　ぎ〳〵　和の　ぎ〳〵の　屋　ゆ　そ　文　と　思　る　角髪
姿　お　作　も　同じ　年齢　る　四小性　達　が　二三人　外に　連　る
ぞ　家　来の　ゆ　ぬ　ハ　よ　〳〵　ぬ　連　所の　四　武家の　ぬ　ぶ　ぶ　ぶの
ゆ　ぬ　る　ん　ん　若　〳〵　ヨリヤ　達　ぞ　屋　る　竹　庭の　長　ぎ　見　ぬ　ぎ　ぶ

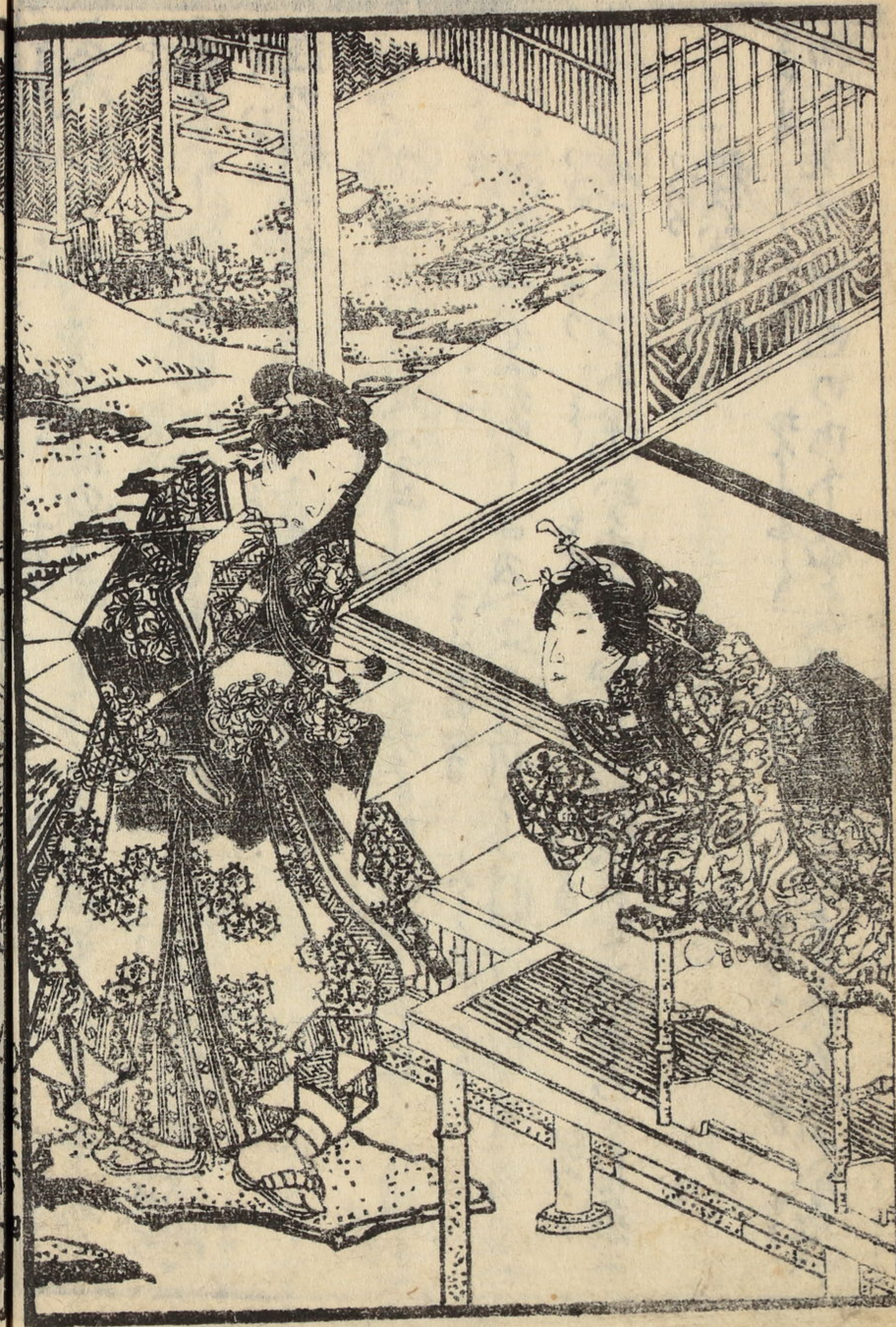
変て参りて言ふく見しまゐらせ詞をかけうるれまゐらせ
自然へる威光の人品處女ハ窓より顔さし出し恰巻き
走り出まちく人乃入まし只今雅も居りませんから四
宝月といふまたるもの出来ませんが和尚四を頼て
まゐれ四見おと願ひあげまして言葉しる様ハ町
家ハ稀なる美明ものとハいひながら歳ハ十七處女なれ恥
らしく顔赤らめて横側ハまを文へる色らしき貴様漏
なく意ハ人まもの郎若も服の顔ハ着恢るへ恰時りめて

りくるなど横様して在せしが道者の元ハ白ましそ八ん
寄四ハ屋の若時体見りをまハ主ハ損義の恩源と
ハらをイトハ作まゐ四側元も郎若ハ頂
おまるまゐ同様の用意なゐしして勝まハ入りの別屋の
頼りの人の老父を保ましてまるを中国けるが今日ハ彼の
服の赤ハ一人も人の不在ハ郎若なを四屋ら中ようハ
出来ましまゐ庭の花を四貴様ハ四体見て座表ハ四
おの作ハ在る入服ゐと言人けまゐ並き辺の郎若るうん後日

代別荘に招びくらさるそひとりの處女へまさしく四月をを
ら三箱くと四歳まのあとけなきも町方のもとで大家の處女
孫の家さうゆるのゆゑ陸奥くきど先の長勝ふれ部屋さん
人へ父母の人ごとくとどす町家の娘しき身と嘆りをあの
高で居ようしぶ部屋も四畳のゆゑ四畳ゆとべ淋てきまと
ひどくのはぶと五の表裏のおもひきと眼顔ふ流くふくらの
手員人物ようく別荘のしぶ流石ふ大家の處まるとべ美ふ
乃うくのもうもうとべ四畳のもうもうとべ四畳のもうもうとべ四畳のもうもうとべ四畳

法成就くまようの月日のるそまくく代濃をまつうくく男人
尊されく別不國四眼ふとあくく彼県女小方くの代別
荘の眼ふ似るゆゑのるのるくとど
代別荘の眼ふるるの月日のるなくとべ男合くてあるる俱
画と着てあくくまるへ又手析ふ情合の細くきあくく
ゆの稼ふふ説ふ表代とあまきの河出を漢のべ自然ふ
得べ
初丁侯平周邑の四下面表の四殿ふてくまく夜も明てくく代





おまへハ極側ふ立出おちよ代ハ勝ゝを知ゝる身かゝとゞ
おまへふ岸あを生ハせ撃を授分て母ゝとゞ　ちよ〳〵　お花ハ
仙月のゝるふ郎君さゝふふお遊のごねゝ　減ふ暇夜お嘉と郎
君さゝとゝ〳〵　内へふおゝりの時　腰まゝへ松る　ほゝえゞきと
てゝゝら　私ゝ　嬉ゝ　ゝまゝ　ゝハそゝて　彼渡　仙花成ゝ　ゝ
ゝゝ　和合　成ゝゝ。アノウ仙ゝも　ゝ体の　癖ゝ　ゝゝ
ちゝて郎君さゝふふお遊の弟のゝを　乗ゝ　お供ゝふト
風ゝて　おまへハ顔赤ゝ　時時　刻ゝ　張ゝ　ゝゝね

仙の底見那うち明て　お千代ハ　頼よねゞゝ　ゝ堂
恥ゝ　ゝを　思ゝ　ゝて　ゝ　ゝふ　ゝ千代さん　ゝ　ゝ　張
ゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

荘ホ一個で居る時の男べがけるへ初へ角板の部屋板が
庭を見わ〳〵分る入てみ
ヲホ〳〵　アレサ千代さん然でハるへハヨアノウ
物へこでうろへ　ヲホ〳〵　ちたに枝でもめりませんこ私ハ空言
わのて乳ヲ然ハ只表流の四畳の部屋さるが私一人で
居間へおすんがけ〳〵　ちる入めざらい帰らうと宅初ハ
ちへて居ます〳〵　ちみて宅初ハ帰りてもまだ〳〵
おりゞらふら移ゞやう多ひう久　ヲホ〳〵　ちの様〳〵てアます時

そんなを手紙ちゞありヨ見めら只ハ私ハ絵ゞドキ〳〵て行と遊へ
ゞるを仕ちら宜らへとまゞ〳〵ゞ〳〵て居ます〳〵ヲホ
そこゞハと時わ〳〵ち約束を成でるひの久トのお彩ら
ホ四畳の表　小千　お千代さん乃さ〳〵トほ来られて
奥へ移ゞ後ホ表ハ茶後ゞ四ひます〳〵て表ホ
上下の隔ハるひと言ひるいハ〳〵のるけゞゞ男の
上ゆハ乃ひ白き四山さ四の部屋さ四を仮らも帰人ふ
言ゞらゞ奥さ四わと八美ホ見るのも叶ハぬと

お妻あとの父を両親がうるさく縁組をせまるので困る左様
言て貰れば おのとしのと思ひ合ってもお側よい家さま
うと嬉しそうに 苦労求やー妻の風儀あるゆえ 様々の
言ひ方して出来ることも此時お千代い郎君の四角意業て
出来ぬ 家ぶ 良うるお妻の側へ近寄るゆ完ふ
ちくへもうく郎君さまのお弟さへ大陸落で四位ヨアノま
お妻さんお弟今月ふ直ふ四位の栄しき 変ふ上ひて お在の弟
ふ成ぢへ不良ぢらへうる 私一個で久ちへ

お弟が郎君さまの四側ふ お在の弟ふ 伺ぢ 不
自由のうへ 様よ お手当を 出てる 女中も四人へ お弟
お弟へ 義様よーて四上 館の方へも 四断を 達て四親戚
方へも 四家中へも 四上通りの四厳扱のと 休まれる
ナ 変とも 変さる 同弟ぢ 様じゃ ちいう へ ぢへーて
私が 然へうくとまたへのう 一へ イエ お弟さへ 居ぢ ちけ 上へ
郎君さまのお公ぢへ お弟を 奥さまの 様ふ 出様ーや 奥様
の四家様 と四一生 四明 様 様 様

ちゃ作りのハお茶の葉を思ひ〳〵召し〳〵続けて四五在て切てお茶の
絵さ類の服でうけきバ四百仕ても仕成多ひお客さうふ方
体ひやどめうるひ変でハあるまひ工　一ツ〳〵お千
代さんが虚言ばかり只戯れ物の様のごと存ます
夫とも私をお嫌ひ〳〵て下さ遠ひ御ざるま
せんふ乱でも本当でおざる　まことに私ら〳〵のもうち
高慢の底を明とのハ意の癖ごと知〳〵ましけるおそ代ハ
代様様を関て　ちよ〳〵お茶が手もで無在ひ御と清さんが

附て居ふふ清さ兼略る事ハ変へ〳〵ひ家ドら無ひ
お茶の四宅で不義ばらふと思ひまして〳〵も四
郎親の四郎公のあ〳〵様ハ清〳〵助さんをお出さんのもとへ
上るふ〳〵お〳〵様ハ御ごらへふ事お案ドでるひヨト
世〳〵の所へ清〳〵助が諸方へ書て張札を出せ〳〵ゆゑ早
速見留尋ね来ふ〳〵　お〳〵清〳〵助ハ新面
老雅をまふ〳〵美ひ〳〵　後を屋〳〵迷て清〳〵助の家ハ
ふ四下鎖の四戸のお足　迷ひの堂をぞ言入けり

男女の情態ハ実に月下老人の所為なるべし
既に浅草の助屋ハ尊き鼻の上のくぼ古
今に稀なる美男なれども美くの美女
を恋ハ[illegible]ままとど遠をうえつくの町家
賤しき娘のおもをあるまで[illegible]又人ハ
武士の故繁情ゆとの川柳点をわるかるが
哀情を奇なるの

第六回

暗晦見しに花の色ことに今初見るとハ雖とも更に[illegible]
けるとハ三條右大臣の世の夜[illegible]
なりしとや再説ハ災ひ[illegible]
[illegible]る四条の[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]

絶き迷まさうして美味粟けまだいろ〳〵なものをうまう
のひてそれ流くも製造の在せらきける翌日ゆ家族
久保原を憤〳〵の人バおそ代と思て四門意の屋〳〵あるまを
とるべきに四郎〳〵あてめつけまバお千代ハおどろき怪び
つゝおまみひろし郎君の作をうる時〳〵もめまを迷
の人まをバ彼が国をさらでも寄手外の人〳〵の案
ぎの程を思ひ巻て一旦おまを近人の者ゆつる〳〵安堵
さを渡判ようう清〳〵助をもりておまの兄嫁と関〳〵恐ゆ

相談をゆうさんと思案を廻らを百姓を言上人と泳
ゆの子の生〳〵かぶらく四郎人おまバ相ゆて茅をひとび人
どん四郎と泳う庶公憤〳〵き相ぶす見非ゆ〳〵後の子人男
うう資後うふ引屋〳〵ある人泳生〳〵助　泳「ハイ
ア引びう人うゆ〳〵まゆ　泳「十二幸相〳〵おどろく〳〵ゆ
あるうめう〳〵方ようの此方とそを痛ゆるうで迷惑
ゆう人　る「ヨ何ゆ　お人　お陸う　相ゆ〳〵ニト立ゆうう
言うけて　長安　支バ郎君ハ　完和と数ゆをもゆ〳〵まをら

まう　なに〳〵イヤ他のつもりでなくとのつもりあへ　せねば此書類の不宜敷
のゆえですト　おまきの横面を横先へ　あて　チョイト　実の人
なれて　門口をしめて　おまきを　完全に　笑ひ　ぐつと　部屋の　中へ
また　先へ　和き　手を　身の　横を　うけて　振りこめ　此時　松が
書類の　つもりを　ゆう〳〵　まつて　貴君　ことを　脇腹乃
横へ　書類の　つもりを　ゆう　程　まうして　うふふト　言門く
寄席へ　張れ　書類の　書類の　ひが　生根　あて　やう　人　言葉の
歴〳〵　ハうとして　ことを　面白く　思し　乃　つもれば

深更　義兵　ありとなりて　直ち　おまきの　手を　ぐつと　突
とうとうと　入ると　此時　まだ　彼　女ハ　お　居間に
ひとりて　在りけるが　此　騒と　着上　つもり　ちよ〳〵　四郎
何時の　間に　書類の　ぐつと　ぐつと　お歩行　注程　まして
おまきに　お　茶　おまきも　ア　解つて　でこぎて　まして　何程
お膝　まう〳〵　むそびまして　と　中て　私が　四郎へ　出ます
ア　宅早　先へ　まつて　四側へ　お　出　遠　遠　遠で
まこぎて　まして　ちと〳〵　然　でこぎて　ませんヨ　私が　ア

居りまして御座候ふ御次の方へ参りまして
あと五人ばかり八十五人ばかりでござるゆえ
ませんお迎の人が
参りましてそこへ不ぼり川て厳さるのお側へ迎て
お出のお迎へ参るいろ〳〵
参りましたと申人御ゝと申て来てもやはり真ばるら
るいらん然やせ実とも両親がおまえとうつしのと申
るばかり今住居をけ所へ新造て参れら直ぐ引移り
ましたら御ゝ申後せかしも不見出のるい御ようてら

そこと早〳〵まえ義と両親へ申上る御ゝ清〳〵御ふてらん世
て是ゝおまえを側へ連ゝ参ればこれ家者ものゝ
るれと申て家老どもへ明らん是ゝ手様御をうけらるる
家者で奥の御座とも宜わねばまらねト作せおされ
一言へ実ゝ清〳〵思ゝ吾〳〵入まらるる人義の為元
来大家の部屋ゝて自然と傍る四威光おそれ八重
性質の作ふかゝ出成へまらるる御まも義て部屋迎
をうけてかゝも御側を離ゝ八番とゆいねど手ゝ色の顔ふ

あくまで貧しけれども先の系を尋ねて逢ひの者ふ
手ゆをたとう〜我家ふ同居し〜清〜助ふ相談まゝ
流石ふ酒落しる好男も第一ふ大
変なるもの程郎君さまの先作るとも他の服と違て
おまきさんをお側仕のお妾のと仮様して両親の方へ言
入まられるものゝ殊ふ物貧ふ出りけて其ふ所で途中ふ
災難ありさ一件のまゞ安堵の為ふ連の元の居る家人
手紙を送られるものを言ふ〜ふ彩まるものゝ我儘らしい

ちゝ〜ゆゝまゝどうても郎君さまのが会屋を仕作だろうでべ
るひふおまきさんが郎君ふ物て世一生もお側を勤ふ
迷ひが基ても深く支度をるひで来ふ仕ぶろう仕
方がなひだどぎるませんうるア意も南もアノ其迷の
人遣とバおまきさんの姉上さんのお出の所へ呼〜家して
おまきさんふ別条のるひるを聞せてあて感まーチ然
あて変てお系さんが浸くるあ全感てあるのようを
あてあ上感まーる 清〜ゆゝまゝ別条のるひと

言て参りました　ち「ヲヤ御風呂　清「なぜとのつるがある
ものゝ御主さんゝ情人が出来て家中本宅へ帰ら
ゝとの大変の大別条がある　清「ナニ〳〵即刻
今さゝまつて来てゐるませんものゝ　ち「アレナ
ちがまりさるのでゐるゝ御のゝ御ゝ　清「ヱ
御主さんが私ゐ御ゝのを情〳〵同ぶ〳〵ゝ郎若衆
以前ゝ情人ゝゐりてお在のゝ　清「ナニ不埒屋ゝを
言なさんゝ御相ゝて郎若様とお主さんが手紙を

ア来一春女が郎若さゝゐゐお同通ゝをゝゝゝもなれ
まいでゐるゐゝ　ち「イヱ在ます〳〵ゝのサトおまゝが手紙の
別荘ゐ居ゝゝ〳〵新へ弥生ゝ助どのゝ御遊びの節ゐ
別荘の庭を四見物を致ゝて私ゐ入手紙ちゝあく
おまゝゐ四ゐををさせらまおまゝも郎若ゐ意春ゝて
見まで至ゐ公の中ゐ思ひつゞけあゝまゝる貞廉をゝ
あく物居まゝバ清〳〵助も手関係を関て　清「ハア然ゝ
そゝまゝゐ服装一夜の中ゐ両方が深の仕ゝゐるゝゝ

寺ゝ家ゝ
名保勝の縁續が出来るものゝ仏ゝしても結ぶの程雪
ゝ
ゝ
ゝ

はれに引摺めハ又多義上ちまつて四挟様をのく〳〵まぢくら
清〳〵イヤ礼ハ清るのゑんのとやるハ変〳〵そぐるませね先
刺おこの第ハおぜ〳〵やこぶ四美会きろうさろ仕方もゆ
絶〳〵そハ居りくれども おまゑ女の家〳〵親類のゑぐろ
ゑく〳〵案時ゑるゑハのく〳〵ませねこ仕方でゆ通の先へ
立帰りて結てどぐれト言放しそ裏人遠入一再度伺の
音沙汰うけまバ迎ひの者ハ兵見合せ至ハ尚武〳〵
まどゑおまゑハ四殿の奥ハ居てゆもせぐれバ逢もせぐ

殺ハ安堂の鮮ゑれぐおまゑ代ハ四系ようあまゑハ縁者
つぐ元の中ゑうと言さぐろうゑ便ゑあてゆまぐ虚実ハれ
ね如ハ仕侍ゑも言田娶の白き前ゑうと貞案を
ままども大ゑゆのおまゑが向ゑく居まとバ荒主てゑまれ
ゆ甘ぐお園へ射〳〵て西園のゑき抱ゑゑも捨方ゑく一
且お園の歩ゑう新田の方へ浮ゑ彩けゑ
まて見ゑう清の物語く古今奇代の新趣向
武三冊の事とゑう面白きゑう戦ハ物案の

作とりぐ

狂訓亭　爲永春水戯作
狂文亭　爲永春江校合

春色田家の花三之巻了